

● ナチュラリスト 伊東保男さん

交通網が整備され、多くの人が足を踏み入れるようになった立山。人の侵入は、それ自体が環境悪化を招く。立山を受継ぐために、環境保護に取組む人がいる。環境保護の意義をどのように訴えているのか。彼らの活動への思いを聞いた。

昭和46年6月、立山・黒部アルペンルートが全線開通した。一大観光地の形成で沸く世間の流れとは逆に、立山の自然は守られるのだろうかと不安視する人たちがいた。本来の立山の良さが壊されるのではないか。同年10月、その声が形になる。県内各地から集まった有志により、全国初の超党派の議員を含んだ自然保護団体「立山連峰の自然を守る会」が発足した。

会の発足時に事務局を務めていたのが、伊東保男さん。「立山は県民の心のふるさと的存在。立山町の人だけでなく、私のような町外の人にとっても大切な存在なんです」。メンバー

は皆、立山の大自然を愛する人たちだった。

富山地方鉄道株式会で電車の運転士として働いていた伊東さん。山が大好きだったが、仕事の都合上、お盆と正月に合宿を組む既存の山岳会には入れなかった。同じ境遇の仲間たちと

本を読んだりして我流で山に登った。そんなとき、ナチュラリストの養成講座のことを聞いた。「ここなら好きな立山を教えてもらえる」と思い、昭和49年に初めて開かれた養成講座に参加した。

「人間は、右手で自然を壊し、左手で守ろうと叫ぶ生き物だ」と言う。人はこれまで、豊かな生活を得るために自然をどんどん切り開いてきた。そのスピードはあまりにも速く、自然は破壊の一途をたどった。それは、人間の未来を危うくする行であった。「絶滅の危機にある生き物を守ろうというが、人間だってその一種なんです。誰かのためじゃない、自分たちの未来を守るために自然を守るのです。私たちナチュラリストの役目は、そのことを人々に伝えること。花の名前や観光名所を説

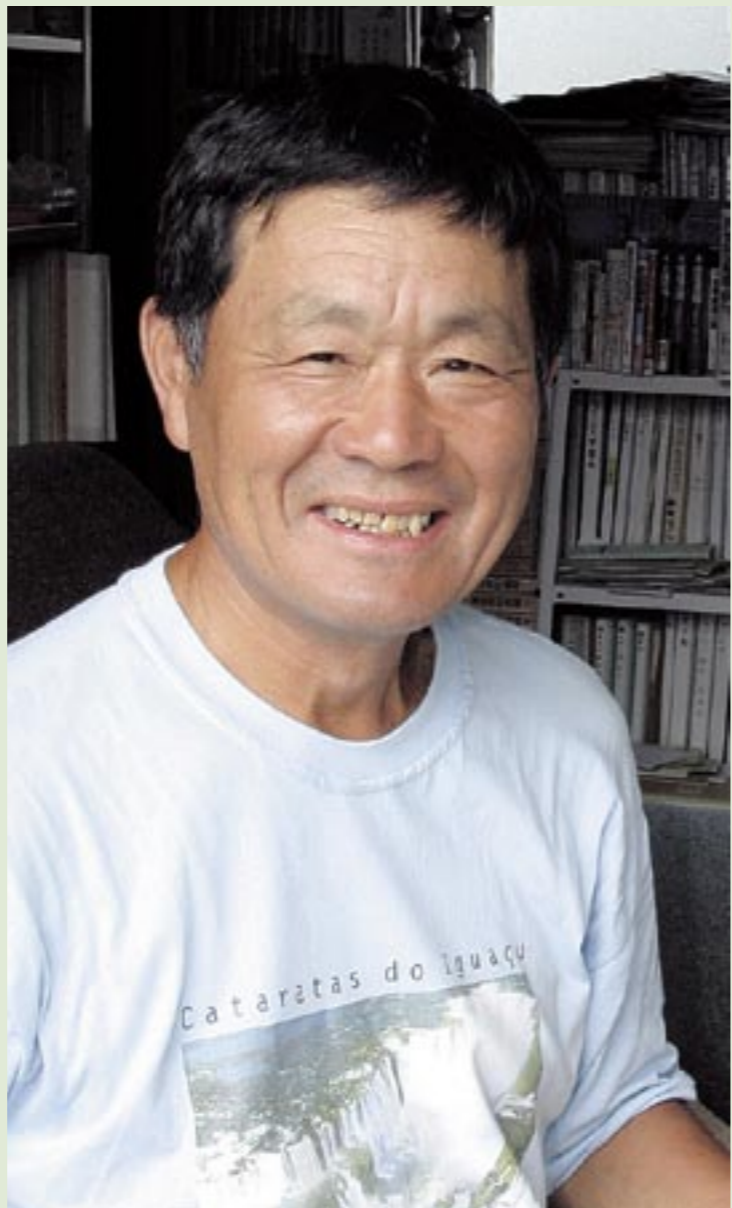
明することだけが、私たちの役目ではありません。」

興味深い話を聞いた。食堂周辺で植物が生えるのは、表層土という黒い土があるところだけ。実はその黒い土、1センチつくられるのに100年もかかるという。「登山道にはロープが張ってあるでしょ。あれは何のためか、よく考えてください。ロープの中に1歩足を踏み入れて、靴の裏に5ミリの土がついたとします。あつという間に50年が失われて



▶ 伊東さんの書斎。本棚には立山に関する本がずらりと並び、

絶滅の危機にあるのは、人間だって同じ。自然を守るのは、自分たちの未来のためなのだと、いうことを伝えていきたい。



● いたう・やすお
富山県ナチュラリスト第1期生(昭和49年)。NPO法人立山自然保護ネットワーク(旧立山連峰の自然を守る会)理事。富山雷鳥研究会副会長。上市町在住。62歳。



▶ 観光客を案内する伊東さん「右端」。

「申し訳ありません」。ちょっとだけ失礼して： などという気持ち。絶対には許されないのだ。「ロープとロープの間、つまり歩道の部分は、立山全体の自然の中から人間が借りている場所なんです。それ以外はもともと立山に住む動物や植物の世界です」。あのロープにはそういう意味が込められているのだ。

伊東さんの書斎には、天井まで届く本棚が6本、肩くらいのものが2本置いてある。そこに並べられるのはすべて山の本

だ。しかも大半は立山関係。観光、歩き方、高山植物、信仰など、まるで立山の専門図書館だ。伊東さんはナチュラリストの活動以外にも、立山博物館や立山カルデラ砂防博物館などでボランティア活動をしている。「僕らはあくまで素人ですからね。人に話をするとき、立山のデータが頭の中になければ、まともな話はできませんよ」。よく見ると、本棚に入りきらない本が足元に積み上げられていた。本だけではない。室堂の初雪

や雪の大谷の雪質調査データなどを集め、毎年整理している。「自分の話を聞いて誰かに感動してもらいたいと思ったら、やっぱり勉強するしかありませんからね」。平成2年から始めた月1回のナチュラリスト仲間との学習会も、これまで1度も欠かしたことがない。

伊東さんが今、最も必要と感じていること、それは環境教育だ。「教育という堅苦しく聞こえますが、先生と生徒のようなものじゃない。観光客に観光案内をする中に、ちょっと入れてやるだけでいいんです。例えば、ぼさっきの表層土のような、分かりやすい話をね。演壇に立って、ほとんど心に残らない。立山を舞台に、ナチュラリストの立場で、目の前の教材を使って伝えていこうと考えている。